

佳作賞

「筆談の妻」

「雑記囃子」20号

## 稲葉祥子氏

稲葉祥子（いなば・さちこ）

一九六七年一月五日生まれ。堺市在住。大阪府立大阪女子大学文学部国文学科卒。日本語教師。大阪文学学校研究科修了。二〇一一年から二〇一三年まで大阪文学学校通教部講師。

二〇〇四年「二番目の森、三番目の海」で大阪文学学校賞佳作。二〇〇七年「髪を洗う男」で第24回大阪女性文芸賞佳作。二〇〇八年、「てくる」掲載の「贗夢譚」が「季刊文科」に掲載される。二〇一五年、「装飾棺桶」が太宰治賞最終候補になり、「太宰治賞2015」に掲載される。「雑記囃子」同人。

七十五歳になる「彼」は市役所を退職し、仁徳天皇陵のガイドのボランティアをしている。今日、彼は妻の見舞いに病院を訪れた。妻は背骨を多数、圧迫骨折しており、彼の介護なしでは生活できない身だが、今回の入院はそれとは違ってナトリウム欠乏によるものである。妻は非常に率直な気質で、彼との見合いの席でも、経済力があり病気の無い人でなければ結婚しないと言い放ったことがある。彼が病室のカーテンを開けると、妻の容態が急変していた。集中治療室へ運ばれ、医者に人工呼吸器をつけるかどうか決断を迫られる。東京にいる息子に電話をすると、以前入院したときはどうだったかという。以前の延命治療に関するアンケートを思い出そうとするが、人工呼吸器についてだけ妻の答えが思い出せない。息子は「父さんが決めたらいい、とりあえず、そっち行くわ」と電話を切る。

彼は窓外の夜の景色を見ながら、妻のことを考える。現在の妻は食事も風呂も排泄も彼の手助けがいるが、頭は株の取引ができるほど明晰である。そのもうけで世界一周の船旅をしたい、という妻だが、今行けるところは、ディケアセンターだけで、妻はそのカラオケで歌う「星影の小径」のCDを買ってきてくれるように彼に頼む。二人は近

所でも良い夫婦で通っていた。手押し車を押す妻に寄り添う夫はある種の感慨を呼ぶのだ。妻は助けをうけるたび、ありがとう、という。その都度、彼の頭には贖罪という言葉が浮かぶのだった。二十四年前、彼は職場で市民から執拗に攻撃を受けたストレスと、妻の正直な言葉に傷つき、一人の場所を確保したくて、内緒で一年ほどアパートを借りたことがあった。今の献身はそのときの罪滅ぼしなのではないか、と思うことがある。

外は雨が激しくなり、雷が鳴り響く。突然、彼は人工呼吸器を使わない、と決める。それを医師に伝えようとした瞬間、息子から電話が入る。「人工呼吸器、つけてもらおう」息子の言葉に、彼は「やっぱり、そうしたほうがええよな」と答える。午前一時を回り、東京からやってきた息子を見て、俺はこいつに救われた、と息子が誇らしく思える。息子は母の変化に涙ぐむが、彼はそれを見て自らの冷やかさを感じる。

妻は意識を取り戻したが、人工呼吸器をつけているため話せず、筆談が始まった。はじめに書いたのは「ラジオ」。彼は朝、ラジオを聞きながら台所で立ち働いた明るい妻を思い出し、早速ラジオを持っていく。次の日は、「この病院、しばってかせぐ」「ふじわら先生、きらい」などの病院への不満。看護師が見ている前で書くので、彼は冷や汗をかく。命の瀬戸際でも妻は変わらないと思う。その次の

日、妻はラジオの音楽を聞きながら、歌詞を書き留めている。「星影の小径」である。妻の手の動きに合わせて、彼も歌い出す。「私は散つてゆく、アカシヤの花なの」に、はつとする。歌い終わると、「ありがとう」と妻が書く。「たのしかったわ」。うちに帰った彼は、その言葉がまるで最期の言葉みたいだと考える。

翌朝、彼が訪れると妻は眠っていた。ベッドに置かれた書きかけの紙を見て、彼は血の気が引いていく。「梅吉アパート201号室」それは彼が以前借りたアパートだった。妻は知っていて黙っていたのだ。突然、妻は再び危険な状態に陥る。医者が心臓マッサージを始める。その途端、妻の肋骨のへしゃげる音が聞こえ、妻の叫びが彼の口から出る。「いたい、いたい、もう、けっこうです」心臓マッサージはいらないと、以前妻はたしかに言っていたのだ。

二十年以上、秘密を胸にしまっていた妻が、彼にはあたらしい妻に見える。しかし、その下になじんだ妻がいることも彼は知っている。幾層もの妻がひとつになつて横たわっている。そのすべての妻の手を握ろうと、彼は手を伸ばした。